セフィリアの使命
CRIMSON COMICS

この作品を読んでどのような感想をお持ちになりましたか？
コミックスの編集の参考にさせていただきますので
下記の住所あるいはＥ－ｍａｉｌにて感想を送っていただけると光栄です。
その際は 以下のアンケートにも是非 ご協力ください。
〒２２３－００６１ 神奈川県横浜市港北区日吉１－１－８　１０２号
山地様方　クリムゾン係　まで
または yamaji@on.cs.keio.ac.jp

ホント、アンケートに協力してくれる人が少ないのでどうかよろしくお願いします。(汗)

アンケート

Ａ あなたはカーマイン作品のどこに魅力があると思いますか？　（３つまで）
１漫画をきちんと描いている　２ペンタッチ　３トーンワーク　４構図
５キャラクターの顔（表情）　６体のデッサン　７セリフ　８シチュエーション
９鬼畜なストーリー　１０レズ作品が多い　１１表紙　１２あまりドロドロしていない描写
１３　雰囲気、演出　１４その他（　）

Ｂ これからのカーマインに望むことはなんですか？（３つまで）
１値段を安くして欲しい　２発行ペースをあげて欲しい　３クオリティをあげて欲しい
４ＨＰの更新をちゃんとやって欲しい　５レズ以外も描いて欲しい
６純愛系も描いて欲しい　７もっと鬼畜にして欲しい　８続き物はやめてほしい
９もっと続き物を続けて欲しい　１０その他（　）

Ｃ クリムゾンをどこで知りましたか？

Ｄ この中でやめて欲しいことは何ですか？五段階評価してください。
（1がやめて欲しい　5がかまわない）
aHP を閉鎖する　ｂ派手に活動する　ｃ同人が消費税込みの値段になる
ｄ超マイナージャンルの同人誌を描く　ｅ即売会に参加しなくなる
ｆ性器をはっきりと描写しない　ｇ限定コピー本を発行　　ｈ鉛筆ラフ本を発行
ｉやおい本を描く　ｊ加筆をして総集編を発行

ご協力ありがとうございました。

セーターの中に手を入れてよ、あの柔らかそうなオッパイを揉んでやりてェ
あの女、うなしおたまんねェな。苦悩を、ひひひしてやったらどんな顔するんだ…
色っぽいケツしやがってよ、両手で鷲掴みにしてやろうか

何人もの男たちの、そんなどす黒い欲望の先を、1人の若い女が歩いている。

スカートから、すらっと伸びた脚は驚くほど細長く、短めのタイトスカートに包まれたヒップの盛り上がりがキュッキュッと誘れている。

セーターの上からでも匂い立つ、抜群なプロポーションと、清楚な色気。

ウェーブのかかった長い髪は、朝日に反射して煌めき、しっとりとした薄桃色の唇を甘く噛み立たている。

スリットの隙間から、スカートの奥まで覗けそうなほど露出した魅力的な太腿に、後ろを歩く数人の男たちが、熱く視線を突き刺している。

静かな表情、そして優美な足どり。

セフィリア＝アークス。　人混みの中でも、一際輝かんばかりの美女である。

セフィリアは、一点に集中していた。

ボルディン＝サーラム。

麻薬組織の大物と、つながりがあるとの噂が絶えない少壮の実業家である。人格を疑問しないというふれ込みの、新しいドラッグの開発・製造に携わっていると言われている。その余勢を駆って、最近では、悪徳政治家にもその触手を伸ばし始めているらしい。ここ数日のうちに、その政治家たちと接触する可能性を、クロノスははじき出していた。

・・決して思い通りにはさせない・・・

決意を静かに胸に秘め、今日までボルディンの動きを追っていたのだった。

ホームで電車を待つ格好のセフィリアは、青空を背景にして、眩々しいまでに美しい。

しかし、短い命な自分の笑顔が、自然と人目をひいてしまうことをセフィリアは知らない。

もちろん、ホームで獲物を物色していた海賊たちの目にも、気づくことはできなかった

セフィリアの使命Ⅲ
(電車編)

絵・カーマイン
原作・札幌なかなか

セフィリアは、ボルディンを
見失わないよう、隣のドアから
電車に乗り込もうとした。

しかし!
セフィリアは今まで、
このような満員電車になど
乗った経験はなかった。

…はぁ…
言ってはいけないの
でしょうけれど
暑なこと…

でも…
ここであの男を
見失うわけには
いかない

スッ

ガッ

ドンッ！

その背中を、遠慮もなくつき押して、後から後から乗客が乗り込んでくる。

「あっ」

一度よろめいただけでは済まない。体勢を立て直す暇をおかず、押され続ける。胸がとられ、胸が潰される。

奥に奥に、押し込まれる。

他の乗客の足を踏み、足の置き場を探すうち、両脚の間に他の乗客の脚が突っ込まれる。

気づいたとき、セフィリアは、伸びた片脚は乗客の身体に挟まれ、背の高い男と抱き合わんばかりに、その身体に顔を埋めるような形となっていた。

少し開いた両脚の間に突っ込まれた男の太腿が、セフィリアのタイトスカートを半分ほども捲り上げている。

そんなセフィリアの正面で、背中で、男たちはニヤニヤとした笑みを浮かべていた。

・・この女、どうやら満員電車は初めてのようだな。くくっ、最高じゃねぇか・・・

・・こんな美形の女の身体を楽しめるなんて、今日はついているぜ・・

セフィリアを取り囲んでいるのは、ただの乗客ではなかった。

・・ボルディンは？・・

自由になる片腕を胸元に引き寄せ、正面の男との空間を確保して息をつくや、セフィリアはすぐにその姿を目で追った。

幸運にも、ボルディンは横を向いた正面だった。距離にして１０メートル。いざとなれば、直接、目に見えなくとも、気配だけで様子を感じることもできる。

ボルディンは今、携帯電話を取り出して何やら話をしているところだった。

・・やはり・・今日は、何かあるのかもしれない・・・

セフィリアは、その口の動きに集中しようとした。

そのときだった。

セフィリアの身体に、予想だにしない異変が起こった。

初めての触れに対して、剣の反応も示すことができない。
いや、このような低劣な行為に、自分が何らかの反応を
することなど許せなかった。
平静を装う、その姿勢には、いささかの変化もはられない。
しかし―セフィリアもまた「女」であることは事実だった。
それも一般の、世俗に明け暮れる普通の女性とは比較にならぬほど
男女のことには慣れも経験もない「女」であった。

魔族の行動開始、そしてセフィリアの試練は、魔族の無慈悲なことこそ、試練の中枢だった。
覚醒した魔族の中では、無数の身体の動きや反応で、その様子を感じ取ることができる。

・・・ただ、その暴力的な姿に用意見せた、セフィリアの行動の意味、その身体に、何が起こっているのか・・・無だ、無慈の行動を口ばく伝えている。

セフィリアが、身じろぎもせず、半身を捩っていても感覚には二段階だった。

・・半気を捩っちゃってよ・・可愛いぜ、イヤらしいコトされて声も出せないか・・

・・しかしまぁ、間近で見ると、凄い美人だな、たまんねぇ・・・

・・どれ、俺もそろそろ、あの黒くて艶めかしそうな太腿を、この手で楽しませてもらおうか・・

右横の男が、セフィリアの太腿に横から手を伸ばした。スカートの中に手が差し込まれる。

ビクン！

不意に太腿を撫でられ、美女の身体が軽く反応する。しかし、その表情は少しも変わらない。

・・ほう・・・反応できないか、この女、お嬢様か？・・・

半身を捩い、自分の力を見ようともしないセフィリアに、男はニヤリとした。

無防備な手を動かし、スカートの中の太腿を撫ぜ、奥まで覗いとがらせようとする、眩々しい若い女の太腿が、手の平と心地いい。

・おぉぅ・・気持ちいい手触りだぜ・・・ふふふ、いつまで平気でいられるかな？

男は、セフィリアの表情を見つめながら、ゆっくりとイヤらしく太腿を撫で上げる。

・・くっ、嫌からる・・・

新たな手の出現に、ハッとしながらセフィリアは、反応を抑めかねていた。

今は、すぐそこにいるボルディンを追っているのだ。無様な行動で、目立ったり、驚きとなったりする可能性は極力避けるべきだった。そんなことにでもなったら、目を当てられない。

自然と、無慈に抵抗することにも、慎重にならざるを得ない。

しかし、スカートの中に侵入してきた手は、太腿を撫でながら、少しずつ高い上がってくる。

ビクン！

また、腰が反応してしまう、無防備に太腿を撫でる無慈の手が、時折、敏感なポイントに触れてる。

無視したくとも、「女」の身体が、無慈の手を無視できなくなっていた。

・・くっ・・悔わしい・・・

あくまで冷静な表情は崩さず、無慈の手をスカートの上から軽く押さえ、離しようとする。

やんわりと、男の行為をいなすつもりだった。しかし、男にはまるで効果というものがなかった。

押さえられたスカートの中で、無慈無防に太腿を撫で回す、その指先で、太腿の内側を刺激し、若い女の表情と反応を楽しむ。

・・身体の方が、とうとう言うできなくなったか？　へへへ・・ビクビクしかって

・・抵抗、敏感な太腿してるじゃねえか、その平気そうな顔がいつまで保つか、楽しみだぜ・・・

ビクン！

今は、何者かの、女の反応がセフィリアの身体から湧き起こる。

・・くっ・・・また・・腰の手が・・・

太腿から、腰の手がスカートの中に侵入してくる。脇いて、その後ろからも、

数本の手が、次々に、絡々とスカートの中に入ってくる。完全な防ぎようはなかった。

スカートの裾を掴んで、下に引っ張り、それ以上の手の侵入を阻むのが精一杯だった。

それでも、数本の手が突っ込まれたスカートは、太腿のやば以上捲れ上がってしまっていた。

脚を押さえてはいるものの、その中では、何本ものの手が太腿を自由に撫で、弄いている。

・・んん・・っ・・・

遂に胸の手が、セフィリアの胸を揉う。

セーターの上から、じんわりと柔らかく、右胸の膨らみを下から掴まれる。

その手は、親指と4本の指の間に胸の膨らみを挟え、徐々に強み込んでくる。ゆっくりと揉み始める無慈の手、セフィリアの反応の様子を見ながら、膨らみの柔らかさを確かめている。

その手を引き剥がしたくとも、スカートから手が離せず、胸は好きなようにされてしまう。

・・んっ・・・こんなにっ・・無慈がいるなんて・・・

ボルディンを追跡するセフィリアには、一般女性はとの接触ですら許されない。

刺客もかれた小品も無防だった。

痴漢たちの欲望にまみれた手が、
セフィリアの幼らかな
左右の太ももに絡みつく、
さわ
さわ
さわ
さわ
列車にしてみれば、
電車に乗り込むまでの間、
駅の階段で、ホームで、
執々に痴漢されつづけた
災難だった。
ぶるぶる
・・・・・・!!
ビクッ
欲望そのままに、手をベタベタと這い回らせ、嘗々しい手触りを堪能する、
ドキ身を、多数の触手が這い回っているかのような感覚に、セフィリアは囚われていた。
痴漢の手に太腿を数で撫でられる度、敏感な神経が引き出されてくるかのような気がする。
―痴漢ごとき!!!―こんな――
セフィリアは苦悩とした。
敵を相手に、一度も感じたことのない、身体の知れない疼き!
敵として見られるのではなく「女」として見られることが、こんなにも心が
乱れ、不安になるものだとは、
自分の身体が、紛れもなく「女」の身体であることを、セフィリアはいやが上にも
思い知らねばならなかった。

あなたたち何をするんですか！

やめなさい…！

…っ！

…あっ…！

ふふふ…そんなに嫌がらなくてもいいじゃないか

オジさんと仲良くしようや

R18
恥み顔を羞しく、淫らな仕打ちに耐えようとするセフィリア。
しかし、その器とした表情からただよう官能が、無頼たちの欲情を一層、強烈に誘う。
すげえ 美形だな！
もみ
ビキ ビキ
もみ
俺は 駅で待ってるときから 目をつけてたんだ
もぞ
もぞ
絶対ヤるときの顔 興奮したったぜぇ

男たちは、新しいセフィリアの裏み顔をはうめ、ニヤニヤと笑いながら、ぐっと深く子を潜り込ませる。

セフィリアの身じろぎも激しく、脚の付け根を、内腿を指が這う。

新参たちは、脚を歩ちさんばかりにセフィリアに絡がった。

「姉ちゃんのお尻、小さくて可愛いとこに、深く歩らかいんだなぁ、ふふ・・・パンティも、サラサラしていて気持ちいい手触りだよ、薄く、オシャレなパンティをつけてるのかな？」

スカートを捲り上げた後ろの男が、下着越しのヒップを歩らかく揉み解す。

ヒップの方の男は、ほぼ完全に捲れ上がっている。

セフィリアは、小振りな顔の双丘が、下着の上から男の手に包まれているのを感じていた。

素肌を、直接触られているかのような感覚。　スカート越しとは、まるで比べ物にならない。

それに加え、上半身では、タートルセーター越しに、乳房を揉んだ男の手が円を描くように動いて蠢している。

胸、太腿、ヒップと3カ所を同時に責められ、セフィリアは込み上げる声を押し殺す。

・・あっ・・んうっ・・・

全身たっぷりな男の指が、新しい刺激を受けたヒップをまさぐって暴く。

羞恥心を煽るその触り方に、セフィリアは平常心ではいられなくなっていた。

・・くっ・・だめっ・・

唇から逃げようと顔を振っても、べったりと張り付いた手から逃れられるわけもない。

セフィリアは、翻弄されていた。

「そんな抵抗しても無駄、無駄・・・ほら、ここ感じるだろ」

ヒップを責める男の指先が、後ろから膝の付け根にかかる、下着のラインを楽しみ、セフィリアの羞恥心を引き出すかのように、クルクルと内腿に円舞にと這いなぞる。

後から、男の膝を突っ込まれ、セフィリアの両脚は開かされたままになっていた。

・・く・・くっ・・・膝を・・閉じることができない・・のに・・・

付根をキュッと結び、耐えるセフィリアを無視はいたよる。

「くくくっ、お姉ちゃん、どうした？　何だか顔が消えているぬぇ、この、脚の付け根の内腿が、そんなに感いのかね？　この辺かい？　それともこのラインかな？　随分、敏感だね、ほらほら、もっと抵抗しないと、オジさんの指がお姉ちゃんの大事なところを、触れるほどタチャグチャに汚っちゃうよ、膝を閉じれないのなら、オジさんの指がまさだねぇ」

身の毛のよだつようなことを、楽しげに囁きつつ、内腿の間に指を這める、

さきかなセフィリアの抵抗は、無慈の刺激をよけいに刺激するだけだった。

「うくっ・・！

膝と膝間を無理矢理を通じ、セフィリアは軽く仰を反らせる。

中心部分に、触れてはいない。あくまで、間近を刺激しただけ。

しかし、そこを往復する指は、時とぎりぎりまで、セフィリアの中心に迫ってくる。

・・いいねじゃないか・・もっと恥ずかしくさせてやるからな・・・

強い快感をそそられ、口惜と、セフィリアを沼地で踊る快感に夢中になる、

「ほら、しっかり力を入れないと・・・スカートが捲れ上がってしまうよ」

「たくさんはまれ続けて・・・可愛いオッパイが、隠れ気持ちよさそうだねぇ」

新参たちに、セフィリアを一気に崩そうと迫る様子はない。

一気に崩すのではなく、少しずつ、じわじわと追い詰めてくるようだった。

・・女を楽しむにゃ・・・このやり方が最高よ・・・まったく、嬉ゆうきだな・・

・

美女をゆしずつ責め苦り、羞恥と官能に翻弄させながら楽わう。

・・ふふふ、この女もな・・・

舌なめずりする。

ほろな指使は、セフィリアを、羞恥と官能に身悶えさせることに狙いをめていた。

これは…
いけない……

ビクッ

ぶるぶる

ビクッ

セフィリアが抵抗を続けるほど、男達は、彼らかなものを
彼らに汚す興奮を、ますますエスカレートさせていく。
―ああ―そんなところを―
男の指が進むところ、甘い痺れが広がっていく、
気を抜けば、快感だと誤認してしまいそうな―それほど官能的な痺れだった。
後ろでは、無遠慮なヒップを這う手が、その弾力と下着の手触りを楽しんでいる。
セフィリアの肌に、光沢の色が浮かび、次第に色濃く染ちていく、

ぐっ

太腿とオッパイにお尻も
触られて…
ここはもうウズウズ
してるんじゃないのかね？

ビクン！！・・・

今までに数々責められた性感によって、セフィリアのそこは、僅かな刺激を感じるだけで、ビリビリするほどの快感を伝える器官となっていた。

耐えきれない衝撃が、セフィリアを襲った。

白い喉を反らせ、切れ切れの声を小さく漏らす。

「んうぅぅぅ！・・・っ」

電撃のような痺れが、セフィリアの脳を揺さぶる。

神経を、直接、指で触られたかのような刺激がセフィリアを苛んでいる。

「あっ・・はっ・・はぁっ・・・」

「よっとっ・・・ほら、ではこういうのはどうかな？」

衝撃の余韻さめやらぬ内に、指先で、中央を軽く、横にスーッとなぞる。

「あっ！・・くうぅぅっ・・・」

それだけで、腰がよるよると揺れ、耐え難い快感を身にでいることをねだってくる。

軽く、触れるかどうかのソフトなタッチと、反の身体を知り尽くした、巧みな指遣い。

セフィリアに、抗しきれるものではなかった。

「2人だけで楽しくしてねえで、俺たちも混ぜてもらうぜ」

奥からも、新たな男が、セフィリアの両脚の間に割り込んでくる。腰の付け根の辺りに密着する、無数の指。

「っ！・・・」

思わず、姿勢に抵抗してきた手首を掴むが、全ての手を防ぐことができるわけもない。

両脚の間には、剛毛もの指が割り込み、立てられた指先が、その中心を思いなぞる。

「うっ・・んうぅっ！・・・」

軽くとはいえ、何人もの男に、無遠慮なく敏感なところを責められはたまらないものだった。

手首を掴まれた男が、姿勢に押し当てた指を伸ばし、横になりつける。

「楽しくしてやるからよ、気持ちよくなりな」

クーク、クークと笑う男の動きと合わせ、敏感な場所が容赦なく刺激される。

「あっ！・んっ・・うぅっ・・・」

耐えきれず、腰がビクビクと反応してしまう。

セフィリアの両脚は、いつの間にか大きく広げられようとしていた。

反抗を示す指の動きに、背中を反らしと腰の前にしがみつき、身体を揺わせる。

同時に、胸の小振りな膨らみにも、男に剛本もの手が延び伸びてくる。

「ギャハハイの力も、もっと抵抗ちょくしと楽しくなってきただろ？」

目隠しを振ろみは、あっという間に男たちの手ではみ出まわされてしまう。揺れるような時きが、セフィリアの胸に込み上げてくる。

ふふふ
たまらないのか？
特にここを
苛められると
たまらないだろ？
ぶるぶる
さわ
もみ
さわさわ
もみ
やめな…
さい…ッ！
さわ

切なく喘ぐ美女の胸に、堅くしこるものを見つけた男たちは容赦なく胸愛を責めていた。

セフィリアの上ずった声が、胸の頂点を刺激する指から逃れようと、激しくなびき揺れる。

胸をもみしだいながら、指先たちは、セフィリアの敏感をその手で触ってみる。上着の中心で、微かにわかる小さなしこりを指にとって、刺激に震えた指で弾く。

「ほら、ここがお姫さんの大切なところだろ・・・

触られている気分はどうだ？」

「どうだ、美人さんだって、こんなイヤらしいコトされると・・・感れてくるんだろ？」

「そ、そんなことっ！・・・」

セフィリアに残された部分は、口唇だけだった。

しかし、その口にも身体にも、無数な指先が含まれているのを男たちは見ていた。

「そうかぁ？　おや？　それにしては柔らかい、ここ、ヌルヌルしているようだなぁ」

男が、セフィリアの股間に差せた指を、ことさらに動かせてみせる。

「んっ・・うぅっ・・」

セフィリアの下着は、サラサラしたお触りであるにもかかわらず、内側から溢れ出ずヌルみによって、ヌルヌルとした感りに変わっていた。

その部分を執拗なまでに男たちの指を、熱く濡らしてしまう。

セフィリアは、耐えきれなく崩れていた。

濡れてるぞ
おい…
無理矢理こんなこと
されてるのに
こんなに感んで
いるじゃねぇか…
すました顔してても
本当はイヤらしいこと
されるのが好きなんだろ
さわ
さわ
……！
違います…！
じゃあ
これはどうだね
ばっ
……っ！

こんな…
こと……

ぶるぶる

許されることでは
…ないの…ですよ…

もぞ
もぞ

グリ

もぞ

もぞ

こんなイヤらしい
コトされてるってえのに
おれ達の心配とは
お優しいことだねぇ

ますます土入りに
可愛がってあげたく
なるってもんだ

ガタン

ご希望ならベッドの上で
可愛がってあげても
いいんだぜぇ

ガタン

そんな…
下劣なことをっ…

「ド変たち、随分とお元気だが、美人さんがほうと、ソワソワするくらいイイ響きだぜ、私はそんなことに興味ありません、という響きがイイじゃねえか・・・じゃあ、もっとド変なことを、その身体に教えてやろうか」

「あっ・・何をっ・・んっ・・」

男たちの手が、セフィリアの口を塞ぎ、細い両手首を掴む。

「んうううっ！」

「へへへ、随分と、色っぽいパンティじゃねえか、お嬢さんらしくてそそるぜ・・」

「好みだぜ・・・俺、こういうの好きなんだ、興奮だよ・・」

男たちの荒息がギラつく中、後ろの男がセフィリアの耳に囁く、

「嬢から、後ろから・・・ふふふ、みんなで可愛がってやるぞ、美人ちゃんに、この世の天国を味わわせてやろうな」

男たちの手が、伸びてくる、白く可憐なドレスは、男たちの淫靡と淫猥さに火をつけていた。

「へへへ、今までの興奮じゃあ、もの足りなかったんだろ？」

「嬢ちゃん、ハードなのが好きなんだな？　お望み通りに、責めてやるよ・・」

男たちの手が、滑り込んだセーターの中で、小振りな乳房を揉みしだく、

セフィリアの胸元は、セーターを捲り上げて両腕から抜く数本の手によって、もみくちゃにされ、次々と顔を覗ける、

「や、やめ・・なさい・・・」

「まだ、そんなことを言ってるのか？　ほれ、こんなにココを尖らせてるくせによ、ん？」

ブラジャーを突き上げる乳首を、指先で弾くように転がす、

ふっくらと張ちわ乳首は、指の責めに、ますます硬さを増してくるようだった。

「んうっ・・んっ・・・」

「少しはお気に召したかい？　じゃあ、可愛いセーターの中をはぜてもらおうか・・・ハード好きなお嬢さんを、たっぷり気持ちよくしてやるからよ・・」

男たちの手が、セーターの裾にかかる、子宮を刺激されたセフィリアに抵抗する術はなかった。

「オジさんたちを楽しませてくれる子とは、ご褒美を上げなきゃな」

後ろの男が、セフィリアの細い腰を、くっと抱き寄せた。

それに合わせて、両側の男達たちもセフィリアを囲む。

セフィリアの、腰から後に留められた手が、腰の付け根からパンティの縁にかかる、

「嬢ちゃん、ほうほとの快感って知ってるかい？　これから味わわせてやろうな・・」

後ろの男の声と同時に、2本の太い指がパンティの縁から滑り込んでくる、

「んうう――――っ！」

敏感な部分に、指が直接触れるのを感じ、セフィリアは激しく身悶えた、

・・あ、あぁっ！　だめっ・・だめっ！・・・・

指の侵入から逃げようと、腰を捩るが叶わない、少し力を加えられた指が、突かれる小さな蕾に狙って執拗に責める、くにゅりと、指がめり込んでいく、

「あっ！　やめっ！・・・くっ・・ん・・・」

セフィリアは、たまらなそうに口を大きく開った。

熱く濡れた唇の中心に、指が挿められる、指が、その周辺に絡りつくだけで、腰がビリビリする、

「凄く濡れているねぇ、ふふふ、オジさんの指はイイだろう？・・・」

セフィリアの、苦悶する表情をねつめ、男はセフィリアを密に追い詰めていく、

上半身では、乳房の上にたくしあげられたセーターから覗れた、

パンティと共揃いのブラジャーが、男たちの目を釘付けにしていた、

「高級なブラジャーしているんだな・・いいぜぇ、その表・・・」

純白の布きれを突き上げる、丸みのある谷間には、興奮な男たちの指が絡みついている、

後ろの男が、セフィリアのそんな姿に興奮気に、硬厚を帯る指を動かす、

お姉ちゃん
かわいいねぇ…
そんなに
気持ちイイかい？

うくっ…！

でもまだまだこれからだよ…
まだお姉ちゃんの
入り口を見つけただけ
だからね

ほら…
中に入れる…

グリ

クチュ

スッ

「何も汚えないくらい、気持ちイイのかね、
お姉ちゃんのココが、どんな具合に
なっているか、オジさんが確かめてあげるよ…」
「あ―く―っ！」
ずぶずぶと、身体の奥へ奥へと侵入してくる指に
セフィリアの顔はたまらず痙攣する。
…あああっ！…
第一関節、第二関節…そして、ほどなく指の
動きが止まる。
セフィリアの秘部は、男の指をその根元まで
呑み込んでいた。

「あ！　あ……」
男の指が、体の内部でくねっている。
…こ、こんなことって…あ、あっ……
膣を打ち込まれたセフィリアは、抵抗の動きを
止めていた。抵抗するどころではない
押し寄せる快感の波は、慣れないセフィリアに
とって大きなものだった。

ドクン・・・

不意に、セフィリアの身体の中で、今までにない強い脈動が走った。

・・身体が・・何？・・・

妙な浮遊感に、身体がふらふらする。

足が地に着いている感覚が薄れ、フワフワするような不安感がセフィリアを襲う。

次いで、強い酒でも飲んだかのような熱が、身体の奥から湧き起こる。

カッとした熱病のような火照りが、下半身を侵蝕し、痺れとともに全身を駆け巡り出す。

・・こ、これは・・・

「へへへ、どうしたんだ？　ふらふらしてるじゃねえか、感じすぎて、もう腰が抜けたか？」

「身体が熱いか？　アソコがズキズキするだろ？　くくくっ、これ、何だと思う？」

男が差し出したものは、透明のカプセルだった。透き通った内部では、何かの液体が揺れている。

嫌な予感が、セフィリアの胸に広がった。

「これはな、人魚の体温と水分で溶けるんだ。強いか、お嬢さんの中で溶けてる頃だなぁ」

セフィリアの表情を探るように、男がニヤリとした。

「身体がウズウズしてるんじゃないか？　俺たちに可愛がってもらいたくなってきただろ？だ？」

「何を、馬鹿な・・ことを・・・」

息が荒くなり始めたセフィリアの強がりは、男たちにも明らかだった。

はぁはぁと、肩で大きく息を始める美女の表情は熱っぽく、身体の中を駆け巡るモノを必死に堪えているようで、たとえようもなく色っぽい。男たちは、自然と股が熱くなるのを覚える。

「強がりじゃないかね・・・やはり、イイ女はそうでなくてはイカンよ。簡単に降参されたら、オジさんも困るんだよ、もっと頑張って、オジさんを満足させてくれなきゃな・・・」

後ろの男が、パンティに指を差し込んだまま耳元に囁き、耳朶を甘に含んだ。

「んううぅっ！」

さらせた熱い舌が、耳朶をなぞり耳の中に割り込んでくる。

「あうっ・・」

反射的に首筋にも、ヌラヌラとした温かい舌の感触を感じ、思わず声を上げる。

「美人さんの首筋は、やっぱりトチいな、こんな風に、責められるのは好きか？」

横の男が、白く細い首筋に唇を押め、勢いに唾を出る汁を流め取る。

2人の舌の責めに、早くも、セフィリアは強烈な快感を覚えていた。

おい姉ちゃんの乳首すげえぞ…ビンビンじゃねえか
クリ
クリ
クリ
アソコだってスケェことになってるぞ
クチュ
クチュ
やあああう！…
レロ

ん〜〜〜!!
ギュッ
びくっ
クリクリ
びくっ
ビクッ
グチュグチュ
両手で絞められながら、あまりの快感に
声が抑えられそうにない。
「んうううっ!!!」
口が塞がれているのは幸いだった。
秘部からヌルヌルと液が出入りするたびに
強い電気が身体を駆け抜ける。
脳髄まで痺れてくるようだった。
揺らな状態がセフィリアを高みに突き上げる。
秘部を犯す指の律動に、セフィリアは翻弄だった。
―あっ―ああっ―だめっ、ああああっ―
男達の指に耐えられず、ビクビクと痙攣しながら
ついにセフィリアは絶頂に達した。

「もう、イッちまったのか？　まだまだ、これからだぜ？」
「ほら、どうした、どうした？　こんなもので降参していいのかね？」
性器の全部に挿入、口を閉じ、唾をギュッと飲んだセフィリアを、男たちは世に褒めあげる。
セフィリアを絶頂に追いやった男が、唾を飲ませすぐに、隣の男が自分の唾を侵入させる。
後ろの男は、パンティをとるまでずらし、張りのあるヒップを直接撫で回している、もうたまの手は、その奥にある花びらをなぞ。
セフィリアは、絶頂を迎えても執拗に何かうことは許されなかった。
「ふう・・っ・・う・・」
再び、男たちの指先に、身体を反応させられ始める。
女に手慣れた男たちは、どこまでも貪欲だった。

セフィリアの中心に突き立つ指が、ヌラヌラとドロドロに液体を絡いている。
その指先では、パンティの縁を、横にずらしてねじ込んできたたくさんの指が、熱くどろどろと溶けた液を絡き回す。
「あっ・・うんっ！・・・」
女性いするような快感に、セフィリアの腰がくねる、白いと顔が顔を出しとなったその奥では、
指先たちの指が、セフィリアの甘い蜜を求めて絡ぶっていた。絡出させられた胸とは、乳房に吸が迫い、薄桃色の乳首に口が吸い付いている、硬い刺りは、男たちの口の中で舌に弱られ、セフィリアの性感を休むことなく刺激していた。
「あっ・・あっ・・」
「くくくっ、凄い感じ様だな、この感はよ、凄く感じるらしいぜ、お姉ちゃんのような美人さんを、いっぺんは抱いてみたかったのよ、どっか、ホテルにいくか？　満足させてやるぜ？」
男たちの言葉責めが、優さを増す。セフィリアはもう、抵抗の口を上げることはできなかった。
全身に電撃が身体と回り、全身が感性な性感帯となっていた。
「そーら、そーら・・・こうやって指を動かすと、凄いだろ・・姉ちゃんの中から、熱いものがどんどんと溢れてくるぞ、ここは、もうグチャグチャだなぁ・・・」
興奮の頂点なパンティは、今や、くしゃくしゃに指を絡えている、パンティを、引き下げなから指の込んでいる手がくねると、セフィリアの腰にキュッと力が入る、横から横から、数本の手が パンティの中と割り込み、女の部分をえぐっている。
気が遠くなりそうだった。
・・・こ、こんなことっ・・・
セフィリアは呟いた。
「だめっ・・やめて・・・」
男の手首を掴み、押し返そうとするものの、まるで力が入らない。
無駄な抵抗に、男はせせら笑った。
ねじこんだ指で、膣を無造作に掻き出し、指の間で丸く円を描いてこね回す。
長い快感が、ビリビリと腰に走れ、セフィリアは背中と白い喉を反らして声を上げた。
「あうううっ！・・・」

なんだこの尖りはよ

ギュッ

こんなにかたくしゃがって

くくくっ…敏感なところに当たっているようだねぇ

……ッ！

いやあああっ…！
んっ!!
ぶるぶる
ビクッ
ビクッ
グチュ
グチュ

身体が大きく跳ね上がり、セフィリアは、
あっけなく2回目の絶頂を迎えた。

「またイッちまったなぁ？　よほど、こいつが好きと見える！」
「まだ、まだだ、もっと気持ちよくなりな・・・またイカせてやるぞ！」
相手たちに、指の動きを緩める様子はない。
太くごつごつした指が、秘部を掻き分け、くちゅくちゅと音をたてながら動いている。
その間では、秘部を指までねじ込まれ、内部を掻き回している、
上半身では、くったりと横に寄りかかるセフィリアの胸を、男たちはいいようにもみ
「はぁう・・・うぅっ・・・」
「おい・・・こいつイキっぱなしだぜ！」
セフィリアは、今や、絶頂の連続だった。
理性が吹き飛び、意識がりく線のきえうになる中、全身が痙攣したまま、
男たちの責めを受け続ける、凄まじいほどの快感だ、セフィリアの絶頂は前
代だった。

絶頂を迎えるほどに、身体がいうことをきかなくなってくる。
逆してしまう度に、より深く、痺れが染み渡ってくるのを、セフィリアは自覚した。
踏み入れてはいけない危険な世界と知りつつも、どこまでも甘美で、身をゆねる誘惑に駆り立てくるその力は、秒刻みで大きくなってくる。
・・これ以上は・・・危険・・・いけない・・・
溺れそうになる意識の中、気を奮い立たせたセフィリアは、決断した。
・・一瞬で、痴漢を気絶させる・・・
貫手の体勢をとるセフィリアの指先が、ピンと伸びる。
・・まずは、左右の痴漢を沈黙させる・・・
人間の急所、眼に狙いをつける。
痴漢行為に没頭する男たちが、気づくわけもない。声も出せずに昏倒するはずだった。
そして、今まさに打ち込もうとしたその瞬間。
・・誰かが見ている！・・・
セフィリアの脳が警鐘を鳴らした。自分に向けられる鋭い視線を感じ、瞬間的に、貫手の体勢を解く、鋭い視線はまだ続いている。気のせいではなく、明確な意志が感じられる。
・・一体、何が・・
セフィリアの思考が、めまぐるしく回転する。全ての車両に乗り込み、警察関係の人物に目を光らせているはずの、ボルディンの諜報という線が強い。いや、この車両の乗客自体が、多数の諜報で占拠されていることも考えられる。
ならず者たちを屋っておき、指定された電車に痴漢・痴女として乗客にしかける。
大人しくしていれば良し、警察だと分かれば・・・
普通の女と違う動きをすれば、すぐに警戒されてしまう。
・・それが、狙い・・・
セフィリアは、手を緩りしめた。
今までにない、快感の大きなうねりが押し寄せてきたのを感じ、身体が震えてくる

またまた
イクんだろ？
イケよ…へへへ

言ったろ？
何度でも
イカせてやるって

ビクッ
ほあ
ほあ
ほあ
ぶるぶる
ムニ
ムニ

…ボルディン…あの男だけは
絶対逃がさない…

罠手を打ち込みたいという
衝動に支配されながら、セフィリアは目を閉じた。
―できない！
自分は何のためにこの場所に来ったのか。
この男達を締めつけたところで、汚辱を通して
しまうことになっては何もならない。
セフィリアは覚悟した。

んっ…!!
ビクッ
もみ
もみ
ギュッ
ビクッ
クチュ
クチュ
クチュ
ビクッ

10分後・・・

意識朦朧となったセフィリアを電車から降ろし、梅溪たちは青位置駅でホームを歩いていた。

「姫ちゃん、今からホテルで好きなだけ楽しもうぜ」

今日は、久々に最高な一日となるはずだった。しかし、そんな男たちを待ち受けている一人の男がいた。

「その女は俺がもらおう」

「なに！」

唐突な要求に、梅溪たちが一気に騒ぎ立ち中で、はっとした紳年長の男が仲間を制する。

「駄目だ。やめておけ。厳い主だ・・・それに周りを見てみろ」

周囲には、幾人もの男たちが、こちらを伺うようにして立っている。梅溪たちに緊張が走った。

「す、すまん・・知らなかったんだ・・」

「いい心がけだ。長生きできなくなるところだったな。これからも、女を楽しみたければ、分というものをわきまえておくんだな。ボルディン様の慈悲を忘れるな」

表情を変えもせずに一瞥した後、セフィリアを軽々と抱え、男は厳粛かに歩き去った。

クリムゾン コミックス

大好評発売中！！

蝕み　1～4

迂闊にもクリードにつかまってしまったリンスレットは、手下たちの快楽の拷問によってそのプライドを蝕まれていく…。

愛のコケラくず

召喚士になることを告げるためにルールーの部屋に訪れたユウナを待っていたのは陵辱の宴だった。はたしてルールーの真意は？

翻弄する魔道士

ブラックマジシャンガールの悲痛な叫びは洗脳された師匠に届くことはなかった…。

玉虫色の天使

陰陽連につかまった壱与。縁足の復讐をうける操。キルバーンの罠にかかったマァム。三本立てジャンプオールドキャラクター本。

呪われた巻物

いまだ解放されない壱与。ダイの目の前で侵されるレオナ。キロンシーたちの拷問をうける道潤。ジャンプオールドキャラクター本第二弾。

晴天の霹靂

出来心でユウナを苛めたリュックはルールーの逆鱗に触れてしまい、
自ら用意した道具で淫らなお仕置きをうけるはめに。。

アスミの碁　1～2

プロ試験当日　卑劣な罠にかかった奈瀬は大勢の痴漢に囲まれて…。

伸縮自在の愛　1～2

幻影旅団陵辱本。

あなたが望むなら私何をされてもいいわ　1～4

クラウドを救うため単身で神羅の地下施設にのりこんだティファの
長い受難を描いた長編作品。

セフィリアの使命Ⅲ
（ホテル編）

絵・カーマイン
原作・札幌なかなか

舞踏会、噴水などを備えた一大娯楽に仕立てあげ、その中央に高くそびえるホテル。

そしてこの日、その最上階では、市街地の夜景を一望に見下ろし、3人の男たちが談笑していた。

ボルディンと、黒い瞳の絶えないながらも強い力を持つといわれる商船隊たちだった。

「・・・まったく、本日は、お忙しいところわざわざおいでいただき、ありがとうございました。それはかりか、今夜の商談についても深い理解と協力への強力のご配慮をいただけるとは、感謝の言葉もありません」

ソファから立ち上がり、深々と頭を下げるボルディンに、3人の男たちが大柄な身体を揺すってこたえる。

「ははは、まったく、お前は結構上手い男だな。しかし、まあ、善良な市民のために働くのが、我々の仕事なのでな、気にせんでよい。それより、これからはよろしく頼むぞ」

「無論でございます。おふた方のお力添えで、手ひろく商売ができるのです。売り上げの中から十分なお礼はさせていただく所存でございます」

絶対、力を会長に伸ばしてきたボルディンの財力は、3人の商船隊たちにとっても魅力あるものだった。それが、ちょっと商売をし易くしてやるだけで、礼として金をよこすと言ってきたのだ。ボルディンが、ざっと試算した金額は、莫大なものではなかった。

「しかし、それだけではないのだろう？　ん？」

商船隊の一人、サラザールが好色そうな笑みを浮かべる。

金と権力にものをいわせて、美女をモノにするのが何より楽しみな3人の男たちは、ボルディンのいう「商売」の裏取引にも目を付けていた。

「これはこれは、見抜かれておりましたな。お察しの通り、他にと思っておりましたが、では、センセイ方には、商品の選別といきましょう。十分に、ご満足いただけると思いますが」

はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
ゲッ
……

「おおう・・・」

ボルディンの部下に連れられ、一人の美女が姿を現すと、三人の客は二様に感嘆の声を漏らした。

女は後ろ手に縛られ、身につけているのは純白の下着だけという姿だった。

光沢のある、上品なデザインのブラジャーとパンティには、繊細なレースがあしらわれ、女の美しさを際立たせている。

魅力的な胸の膨らみ、無駄のない腰のくびれ、細く長い脚、眩っそりした印象を与えながらも、豊かな色気を醸しだしている腰つき。

しかし、それにも増して、男たちの目が奪われたのは、その美しくも悲しい表情だった。

憂れ顔の目はしっとりと潤みを帯び、儚々しい様からは、熱い息がそこはかとなく漏れている。胸の膨らみが、何かを求めるように、大きく上下しているのがわかる。

淫靡な美人といった印象が、ただそれだけで、強烈に男をそそり誘ってやまない色香を振りまいていた。

女が、ソファに座る男たちの目の前を一周する間、男たちはその全身を存分に観賞する。

うっすらとした香りまでが漂ってくるようだった。

極上の美貌を持つ女・・・セフィリアは、男たちに見られながら、全身を震わる羞恥の痺れと、燃え盛る熱い疼きを必死に堪えていた。

貴族家で暮らす政治家、ドートンが感嘆する。

「これは何と・・・凄い美人だな、一体、どうしたのかね？」

「気に入っていただけましたかな、では、私の商品のご感想といきましょうか・・」

縛った手首を引っ張られ、ボルディンの膝の上に座らされたセフィリアは、すぐにその柔らかな胸を揉まれ始める。

「うっ・・やめ・・っ・・んっ・・」

身を「くの」の字に曲げくねらせて、胸を揉む手から逃れようとするものの、後ろ手に縛られていては抵抗もままならない。

羞恥が満ちた身体には、ただそれだけの刺激にも甘美しい痺れが込み上げてくる。

セフィリアは、自分の身体が、意思とは関係なく熱く火照り始めるのを感じていた。

「はっ・・はあっ・・んっ・・・はあっ・・」

次第に、熱い吐息に小さな喘ぎ声が混じり始め、男たちの耳を刺激する。

ご覧下さい
これが私の商品の
効果というものです

どのような女でも
我慢したり耐えたり
することはできません

ビクッ

もみ

もみ

ビクッ

なるほど
大した品だ…

ニヤ
ニヤ

しかしまだ
よく分からんな
もう少し
見せてもらおうかな

これは失礼
しました

ダッ

これは失礼しました

あっ！

バッ

んんっ！

ビクッ

スッ

ついに、その股間を、ボルディンの両手が襲い始める。
押しつけられた太い指が、パンティに食い込み、その中心を激しく何度もなぞり動く。
「んうううっ！」
今まで、何とか堪えていた官能の火が、一気に燃え上がり始める。
白く細い太腿を引きつらせて、セフィリアは喘いだ。

「あぁっ、はあっ・・」
ブラジャーの上から乳首を摘み、開かせた股間を弄び、ボルディンは楽しそうに男たちに話しかける。
「いかがですか、私の商品の素晴らしさが、分かっていただけましたかな？　もちろん、直接手にとってご賞味なさりたければ、奥に部屋も用意しておりますが？　ごゆっくりなされませんか？」
もとよりそのつもりの男たちには、是非もなかった。
「ほう・・なるほど、確かに、この品は味見をせねば、見ただけでは分からんからな・・・よし、いい味かどうか、じっくりと見定めてやろう。部屋を用意してもらおうか」
「ありがとうございます」
交渉は、完全に成立した。

両手を束ね、ベッドの上方に手錠で固定された美女に、男たちがゆっくりと迫る。
身動きできない女をベッドで嬲るという別行為は、男たちの欲望に火をつけていた。
「ふふふっ、今から、この胸が直々に味見をしてやる・・」
しなやかな美女の肢体に、舌なめずりをする。
片手でネクタイを外し、服を脱いでセフィリアに挑む。
胸を上に上げ、下着姿でベッドに横たわるセフィリアは、この上ない美しさだった。
「いや・・来ないで・・」
浴槽から身を隠すようにピッタリと太腿を閉じ、切なく男たちを見つめるセフィリアに、男の1人サラザールが、そのとき思いも寄らない言葉を口にした。

……
ギシ

「宜敷する美女を、眺めるのも悪くじゃないか・・なあ、セフィリア姫？　こんなところで会うのも奇遇だが、相変わらず凄い美人ぶりだな・・ゾクゾクするほど、可愛い姫だ・・」

無論、セフィリアの側が凍りつく。

「誰も、知らないとでも思ったのかな？　ずっと前のことだが、セフィリア姫は覚えてはいらんだろう、そのとき、俺はただのつまらん一遍貴族だったからな、しかし、いつか相手を買いたい美人の顔は、忘れないのが特技でね、お姫でも今日は、今までの分も含めて2倍は楽しめるというものよ・・・ボルディンも最高の獲物を探し出したものだ・・」

「ほう、お嬢ちゃんが、あのセフィリア姫ですか？　噂には聞いておりましたが、噂とこれほどまでの美人だったとは、すると、お嬢ちゃんは、あの恐ずくめの舞踏会を開いていたのですかな？　姫だか想像するだけで、興奮しそうですなあ」

ドートンが楽しそうに相づちを打つ。

「さあ・・今夜は2人で、セフィリアちゃんをたっぷりと可愛がってあげましょうか・・」

セフィリアに近づく男たちの顔が、ぎらぎらと二層の好色さを帯びてはえる。

その表面は、天を焦がく勢いで引なりの興奮が、熱く渦を巻っていた。

ベッドの上のセフィリアに、覆い被さるようにして2人の男がにじり寄る。

「まずは、ゆっくりと・・・全裸の、セフィリア姫のオッパイを触らせてもらおうか・・」

「や、やめて？　触らないで！」

「くくくっ、さぞ無念でしょう？　手錠をつけられては抵抗もできますまい？　抵抗できない女が、オッパイをモミモミされるときの顔が、私は大変に好きでしてな・・・さて・・」

男たちは、左右両方から、ブラジャーにはまれた胸の膨らみに手を伸ばした。

「うっ・・・・・いや・・」

大きな手が、ブラジャーの上から胸に触れた瞬間、セフィリアは思わず顔を逸らした。

柔らかく乳房を揉み込んだドートンが、セフィリアの表情を楽しみながらからかう。

「どうかしましたか？　噂の美人ともあろうお方が、こんなもので感がってどうします？　それとも噂の美人というのは、クロノスの宣伝アイドルか何かですかな？　人気モデルとしては、確かにビカイチの美貌ですよ・・セフィリアちゃん？」

じわじわと攻撃をかけ、テクニックを駆使して女を責り、征服する・・・それが、宮廷貴族ドートンの女の楽しみ方だった。

・・私は、噂の美人・・・ヨー、セフィリア＝アークス・・・

セフィリアは、自分に言い聞かせるように自尊を取り戻し、男たちのイヤらしい責めに抵抗しようとする。

クロノスをバカにするのはやめなさい…

ギシ

許しません……！

スッ

スッ

ペロ

ペロ

ほう…どう許さないというのかな？

時の番人だとはいっても身体は女……

好きなようにされてどこまで耐えられるか楽しみにしているぞ…

サラザールの片手は、緊張みにした胸を揉みしだく。ドートンも、はみ出んだ胸を、まるかく揉み始める。みるみるうちに、顔を赤めるセフィリア、

もはや、逃れようのない快感の責め苦が始まろうとしているのを、セフィリアは悟った。

目隠から解、目とを結わせ始めるサラザールが、顔を乳首に近めとげる。

ドートンは、ブラジャーの頭上にうっすらと浮き上がった小さな突起を、唇を込めて見つめていた。女を、それもこのような美女を無理矢理屈服させていくのは、耐えられない快感だった。

「ふふふ、何だか、ここが硬くなっていますなぁ・・・これは一体、何ですか？」

その突起を、指の腹でゆっくりと円を描くようになぞる。

びくっと胸が震え、指から逃げようと動くが、ドートンの指はどこまでもついていき、執拗になぞり続ける。

「うっ・・んっ・・」

「これこれ、これですよ、自分と違くなって・・この知りは・・何ですか？」

ドートンは、顔を近付けるセフィリアに、自分の顔をくっとあつけた。

乳首を軽く摘む度、目をくっとひそめるセフィリアの表情は、ドートンの欲情を更に誘う。

「これですよ、これ、こんなに硬く尖らせて・・・この中がどうなっているのか、見せていただきましょうか・・」

ブラジャーの片方のカップを、くっとたくし上げる。

「あっ・・」

思わず声を上げたセフィリアの片方の胸は、薄桃色の乳首まで男の目に晒されていた。

無骨な男の手の平が、丸い乳房を強で潰し、指先で乳首を転がす。

「綺麗なオッパイが、丸見えになってしまいましたねぇ、白い胸に薄桃の乳首・・・・綺麗な色をしていらっしゃる、ふふふ、しかし、クロノスのセフィリアともあろう人が、男にかられたくらいで、ここをこんなに硬くしていいのですかな？」

セフィリアは答えない。

横に顔を逸らし、乳首を弄ぶ転がす男たちの攻撃から耐えようと、口を結っている。

ギュッと結んだ唇。

緊張に耐えるセフィリアの、顔に汗の滴が浮かった。

サラザールが、手の平を、カップの縁から内側に滑り込ませて囁く。

「これこれ・・・これか？　本当に硬く尖っているな、これが感じるのか？　どうだ？」

カップの内側で、指先が、こりこりと乳首を摘み転がして浮かに囁く。

「ん・・・っ・・・」

ギュッと結んだ唇々しい唇が、微妙に震えてくる。唇が開いて熱い吐息が、今にも漏れそうだった。

男たちは、ニヤニヤとセフィリアの半裸な姿を見つめる。

「それにしても、お美しい・・・どうです？　いっそのこと、私の愛人になって本当のアイドルになりませんかな？　本当は高でも出したら、男どもが群がって大変れでしょうなぁ」

「それとも・・クロノスのジジイ連中に、献身こうやって可愛がられる方が好きなのかな？」

「淫靡なことを言うのもいい興奮にしなさいっ・・私は、そんな女ではありません・・」

あまりに無礼な言葉に、セフィリアの目つきが鋭く出た。静かな、怒りに満ちた目での反撃。

しかし、それすらも、男たちにとっては女の楽しみ方の一つだった。

「そう、その表情、いいぞ、以前、見ていたときも、そんな顔をしたときがあったな、あのとき、この胸元をくっと開いてやりたくてたまらなかったもんだ・・・こんな風にな」

サラザールが、もう片方のブラジャーを、くいっと横に開く。

張りのある膨らみが飛出し、プンと尖った乳首が顔を覗かせる。

「くっ・・・」

口惜しさと怒りが混じったセフィリアの表情に、サラザールは抑えきれないものを感じた。

「そしで・・・舞を踊いたら、こんな風にしてやろうと思っていたのを知っていたか？」

そう言うと、顔を出しにしたその頭上に、舌を延ばし絡ませる。敏感な乳首に、温かく軟らかい舌を絡みつかせ、舐いたぶる。唾液の光沢に、ヌラヌラとまとわりつく分厚い舌。

「う・・・くっ・・卑怯な・・」

顔を出めながらも、思ととした表情又を浮わせているセフィリアに、男たちの欲情は絶頂を迎えようとしていた。

ピチャ
ピチャ
んっ…！
ビクッ
ピチャ
・・・・・
!!
ビクッ

舞にのる男達の荒い息づかいはなるまいとセフィリアは再び唇をギュッと結ぶ。
しかし敏感に晒れる身体は、男達の舌の愛撫に耐え切れるものではなかった。
甘美な疼きが脳に伝わり、
堪なる快楽が圧おしく湧き起こり始める。
……くっ…この程度のことで…
そう自分に言い聞かせるものの、
熱を持った身体はじっとりと汗ばみ、
こみあげてくる官能にシーツを握り締める。

ドートンが、セフィリアの下半身に目を向ける、ぴったりと脚を閉じながらも、絶頂に耐えくねる太腿と間、白く上品なパンティが、ドートンの目に無遠慮に映る。
「ほう・・・これはまた、気品そうな・・くくくっ、どれ・・」
「あっ・・何をっ・・」
太腿にかけられた手に、絶頂への揺らぎの波動を感じ取り、セフィリアが動揺した声を上げる。
「なるほど・・絶頂なセフィリア姫を、もっと味わいたくなりましてな、美女のココを、好き放題に責め嬲るのは、まったく耐えられんものでして・・・まあ、活発な好きともいいますがね、さて・・セフィリア姫のココは、どんな味がするのですかな・・」
触後の方は、挑発のように呟きつつ、セフィリアの両脚の間に身体を割り込ませる。
「ああっ、そんなことっ！　待ってっ！　いや、いやっ！」
絶叫を上げ、暴れ逃げようとする両脚を、ドートンは押さえ込みにかかる。
しかし、手を縛られ固定された身体ではどうしようもない。
「いいではないか、ドートン姫のご命令だ、脚を広げるんだ、気持ちよくしてもらえるぞ」
サラザールが、甘に含んだ乳首を愛撫しつつ、セフィリアの左脚に手を回して抱え上げる。
セフィリアの太腿は持ち上げられ、足元は激しく空を切るばかりだった。
セフィリアの太腿を抱え上げて左右に押し開き、ドートンはその中心に顔を近づける。
広げられた股間は、内腿から溢れ出す蜜で、淫靡な下着をぐっしょりと濡らしていた。
「あぁ・・・いや・・・」
羞恥心に顔を紅潮させるセフィリアに、ドートンは淫猥な言葉を浴びせる。
「ふふふ・・・イヤらしい匂いですよ、セフィリア姫、恥ずかしいですかな？　美女の恥ずかしがる姿は、いい、そそりますな、やはり、女性はそうでなくてはいけませんぞ・・・・くくくっ、しかしセフィリア姫は可愛い、恥ずかしがり屋さんだ、もう、こんなに濡らして・・・くしょくしょでは、ないですか・・・いい子ですな・・」
パンティを横にずらすと、セフィリアの秘部が全てところなく露出されることになる。
「ほう・・・これは・・実に美々しい・・・セフィリア姫は、本当に処女しそうですな・・」
ドートンは、開ききる秘部を見つめた後、顔を乗り出すばかりにいやらしく、嗅いだ。

くっ!!
ギシ
ビク
クリ
クリ
もみ
もみ
ビク
ギシ
ニチャ
ニチャ

その瞬間、強い電流を全身に感じたセフィリアが、背中をのけぞらせて悲鳴を上げる。

秘部にべったりと口を覆い被せたドートンは、セフィリアへの責めを開始する勢いで、舌びら全体をべろべろと舐め上げ、溢れる蜜をすする。

・・こんなことっ！　いやっ、いやぁぁっ！・・・

パンティを剥かれ、その内側を舌に舐め回されるなど、到底耐えられるものではなかった。

しかし、舌技をほどこす男の舌はねっとりと絡き、セフィリアの性感を次々と掘り出していく。

男の舌がその部分に触れるだけで、背筋に電気が走り、セフィリアの身体はビクン

ビクンと跳ね上がった。

たとえようもないほどの、強烈な羞恥と快感にセフィリアは狂いそうだった。

「いやぁぁぁ－っ！　あっ、あっ、だめっ、だめぇぇ－－－－っ！」

手錠で繋がれた身体全体をよじって、その責めから逃れようとする。

しかし、ドートンは、がっちりと抱え込んだ太腿を離さない。

太腿を掴み、力強く押し開き、ますます強く口を押しつける。

分厚く温かい男の舌が、秘部をえぐり始めようとしていた。

熱く柔らかいモノが、奥の中心に、次第に食い込んでくる。

「あぁぁぁ－－－－－っ！」

頭に浮いた白い閃光が、激しく明滅するように輝き、セフィリアはついに絶頂を迎えた。

ドートンの汚液のは強烈だった。

「いや・・・もう・・・やめて・・・」

自ら広く身体をくねらせ、顔を引き、逃れようとするセフィリアを押さえつけて引き寄せ、更に奥まで汚液を侵入させる。

「そう、逃げなくてもよいではないですか、ふふふ、見くびるほど感じさせてあげますよ、セフィリア姫のココは・・・まったく、淫靡ですな、素晴らしい・・・夢中になりそうですぞ！」

グネグネと動く男の舌は、どこまでもセフィリアを責り出し、甘い蜜を吸わすする。

「あっ、あっ！・・・あぁんっ・・・！」

セフィリアは、制止する暇もなくとめどもなく、唾だけでなく上半身全体をたたかに激しく揺った。

その上半身は、サラザールの絶え間ない攻撃を受け続けている、先日への報復は、性らな刑罰となって絶体に伝わり、ドートンから受ける汚液の快感を増幅させてしまう。

3人の男の、ねっとりとした攻撃に、身体がとろけそうだった。

どんなに揺れても逃れられず、汚の男性な攻撃を、胸に絶体に受け続け、セフィリアの胸が柔かく潰える。

ビクンッ!!
ペロ
ギシ
ピチャ
ピチャ
ビクンッ
ギシ
—だめ—だめ—もう——
無理矢理に高みに押し上げられていくのが
どうしようもなかった。
「んうぅぅ—!」
男達の嬲りに耐えられず、
セフィリアは絶頂の快感に声を噛みしめた。

「次に出番しゅうこないましたぞ、セフィリア殿、しかし・・セフィリア殿は、一体、何処イってしまったのですか？　よほど、ココを気められるのがお好きとはえる・・・」

セフィリアを見たろして、ドートンはイやらしく笑う。

ねちっこい性格で、美女を嗜がせ、興奮をイかせるなら手段もないことだった。

「くくくっ、では、サラザール殿にバトンタッチといきましょうか・・・、そうそう、彼は、貴女のファンでしたな、もしかしたら、私以上の熱烈な気めかたで、たっぷりと興奮させてくれるかもしれませんよ・・楽しみですな・・」

「ふっふっふ・・・冗談です、イヤというほどイかせてやりますよ・・」

サラザールが、ドートンに応えて言う。

未だ絶頂の余韻に喘れるセフィリアは、目の前の男が入れ替わるのを、遠い世界のような錯覚の中で聞いていた。

黒に染められた両手首、

白いシーツの上に横たえた、黒から伸びる長い脚、

ベッドに突っ伏し、はぁはぁと荒いはをつく美麗の女、

下着姿のまま、全身には纏いていないものの、それだけに際き立てられるものをサラザールは強く感じていた。黒から折れ曲がるほどの、逞しい曲線を描くヒップが目を惹く。

「ついに、この時に来たか・・」

サラザールは、興奮の笑いを漏らし、うつ伏せになっているセフィリアの腰を立てさせ、腰を高くとりさせる。

腰を高くとり、自分の方にヒップを突きだした格好は、まさに絶景だった。

白いパンティに覆われたヒップラインが、くっきりとサラザールの目の前に浮かび上がる。

たくしとられ、ほとんど脱げかけたランジェーからは、丸い乳房が顔を覗かせている。

極上の眺めと言えた。

「あのセフィリア殿の、こんな姿が見られるとはな・・・くくくっ、いい眺めじゃないか」

今まで、彼らを挑発を繰り返していた女の彼らなポーズに、怒りが爆発と言うな、

パンティに手をかけ、太腿までくっと引きおろす。

「あっ・・・」

黒の白い丸いヒップが剥わになり、その奥に今まで秘められていた女の部分が、完全に剥き出しになる、サラザールは、熱い視線をその中心に注ぎ込んだ。

たまらないほどの艶めかしい眺めに興奮しつつ、サラザールは、セフィリアの太腿を抱え込むとたっぷりと大きく開く、セフィリアの中心は、十分すぎるほど濡れ光り、男の欲情を誘っていた。

「いや・・こんなの・・・やめて・・ください・・・」
いくら時の勇人といえど、セフィリアはなであった。
西つん短いで、男と何かって勝を分けるなどという様ならなポーズをとらされ、恥ずかしさに目もくらむ思いだった。
「セフィリア様が、どれだけの武術の達人かは知らんが、所詮は女よ・・・恥ずかしいだろ？　そして・・その恥ずかしいことをされれば、感じてしまうのが女・・・・ふふふっ、こんな、美結らしい身体をしているんだ、男に抱まれれば、当然、こうなる・・」
サラザールの低い声がおさまると同時に、厚く尖った舌先が花びらを縦き分け、ヌルヌルと侵入してきた。
「くううっ・・・」
声にならない息を漏らし、セフィリアは白を振って身悶えた。

「あ・・うっ・・ん・・っ・・」
尖らせた舌が、秘部にヌルッとさし込まれ、甘い蜜を縦き出そうと動く、サラザールは、セフィリアの脚をますます大きく広げ、そのヒップに顔を埋め、ひしゃぶりついていた。
この美しいセフィリアを手にかけ、思うさま辱らに汚すことがサラザールの無別だった。
舌で執拗く縦き縦ぜ、間髪なく設れる蜜をすする。
身体の敏感な部分を縦き縦される感覚に、セフィリアは戦えた。
「ううっ！」
千度に、ビリビリッとした電気が脳を貫ね。
「ほう、美麗な顔をして、やはりセフィリアもココが感じるか？　たまらんだろう？
では、ここを集中的に責めてやろう、ウブなセフィリア様には刺激が強すぎるかもしれんがな・・」
サラザールの舌は、早る敏感な身を捉えていた。
今まで耐えてきた恥辱の決別は、セフィリアを泣わせることに解放されようとしていた。

「あっ、あっ、だめっ、そんなところっ・・しないでっ！　あっ！」
セフィリアの泣く声に構わず、その膨らみの蕾をグルグルとなぞり、突つく、舌の動きに合わせて、ひくひくとセフィリアの腰が動く。
「い、いやっ・・うくっ！・・・ああっ！」
「感じるか？　凄く感じるだろ？　わかっているんだよ、女の身体のことはな・・ほら・・」
秘部は、もうすっかりグチャグチャだった。
サラザールは、ふっくらと膨らんでいる芽に舌を巡わし、強く押しつけて絡みつかせる。
小さな芽は、舌先に無礼から押し上げられ、何度もとがたに転がされる。
「ほっ・・あっ・・」
セフィリアの声が小さく、しかし鋭く、断続的に漏れる。
西つん短いの手は、はる敷き敷きにシーツを掴み、腰と太腿がピクン、ピクンと動く。
「ふふふっ、ココを責められるのはイイだろ・・・・では、強く吸われたらどうなるかな？」
「くううううっ！！」
腰に強まれたかと思うと、強くその部分に吸い付かれるのを、セフィリアは感じた。
・・こ、こんなことっ！・・・・
セフィリアには、強烈すぎる快感だった。太腿がガクガクと震える。
「んうう！・・・・っ・・んっ・・」
全身を痙攣させ、セフィリアは、気に狂り詰めた。

…っ
!!
ビクッ
ジュルルッ
ギシ
ギシ

「はぁっ・・はっ・・」

快感すぎる快感の波は、容易には引かず、セフィリアの身体を駆け巡っている。

ビクビクと小刻く痙攣するセフィリアを見下ろし、サラザールはナイフを取り出した。

「必要なものは、取ってしまおうか・・・、俺のモノにしてやる・・・」

パンティの端、片方の紐の部に刃を当てると、スッと引ける。

あっという間に、パンティは股から抜け落ち、片紐の太腿に丸く小刻く絡まった。

・・いよいよだな、セフィリア・・・知ってやるよ・・・

サラザールは自分のペニスを振りしめた。

これ以上はないほど膨張し、硬くそそり立つペニスを、セフィリアの秘部に狙いを付ける。

「自分と言しようだな、早く欲しいんだろう？　トドメをさして俺にしてやろう・・」

サラザールは、セフィリアの腰を掴んだ。

異物感、舞りものにされた女のそこは
敏感な部分にもかかわらず、
サラザールの指先をゆっくりと飲み込んでいく、
・・・・・っ!!
ズズズ
突然セフィリアの全身に緊張が走り
身体が大きく前に跳ねる、
開いた唇は、驚愕になったかのように、
声にならない叫びのような息を吐く、
ギュリ
んっ!!

バックで犯されながら、溺れるように胸を揉まれ、硬くきれずシーツを掴みひしゃ、

サラザールの顔がまろかなヒップに密着する、

その男根は、セフィリアをいっぱいに押し広げ、根元まで完全に挿入を果たしていた、

「おおぅ・・・いい気持ちだ・・」

巨体以上の快感に、サラザールは呻いた、

奥まで埋め込んだペニスから、セフィリアの熱い体温とヌメりが心地よく伝わってくる、

ゆっくりと腰を動かすと、ヌルヌルとした感触がペニスを包み込む、

とろける気持ちよさだった、

「これは・・・たまらんな・・」

ペニスを埋め込まれ、喘ぎ鳴くセフィリアを見下ろし、サラザールは呟く、

「セフィリア殿・・・美人なだけでなく、身体の味も素晴らしいものだな・・・極品に女に入ったぞ、あとは、存分に楽しませてもらうとしようか・・・」

厚い腰を後ろから掴み、引き寄せ、サラザールは、本格的にセフィリアを犯し始めた、

「んうっっ!・・っ・っ・・んっ!・・」

セフィリアの、絞り出すような高い声が部屋に響く、

1回1回、力強く打ち込むサラザールの身体を受けとめる度に、セフィリアの身体は、大きく揺に揺れる、

引き裂かれては、回復も徐々と貫いてくる男根の存在感は、圧倒的だった、

セフィリアは、自分の身体が、男に支配され蹂躙させられようとしていることを、理屈ではなく、肌を通して直感的な実感として思い知らされていた、

気持ちいいという次元では収まらない、異常な感覚がセフィリアを襲っていた、

・・こんなのっ!・・気がっ・・狂いそうっっ!・・・

奥を突いしばろうとしても、身体の芯は微に効かない、

「う、うっ!・・・うっ!　いやっ!」

自分の中に、押し入って来る男根の衝撃に耐えようとしながら、たとえようもないほどの快感が込み上げてくるのをセフィリアは感じた、

「なかなかの、乱れようじゃないか・・・セフィリア殿の乱れる姿は、いつかはてみたいと思っていたが・・・想像以上の美貌モノだな」

サラザールは、セフィリアの硬くくびれた腰を掴み、暴風的なピッチを引き寄せ、男の欲望の象徴を何度も突き込み続ける、

ん…!
くっ!!
ビクッ
グチュ
グチュ
ビクッ
こんなの…!
気が狂いそう
……!

正面の壁に張られた大きな鏡には、男の欲情のペニスに責められながら、突き込まれるI字型にたまらない声を上げるセフィリアの姿が、美しくなぞ出されている。

財を失いた胸つん尻いの姿に、2つの乳房が揺れているのが彼らだった。

「顔をはてみるといい・セフィリア姫の美しい姿が、よく見えるぞ・・」

サラザールの声に、セフィリアが上気した顔を上げた、ソックとするくらい、色気のある顔だった。

「こ、こんな・・・」

それは、セフィリアが、今まで見たこともない淫らな自分の姿だった。

突き上げたヒップを男が掴み、腰を前後させている。

恥部も顔わに身体をくねらせ、顔を背けようとしたセフィリアに、サラザールが背中から覆い被さる、片手で身体を支え、もう片手をセフィリアの顎に添し、強引に顔を向かせる。

「自分がどんな姿で、犯されているのか・・・よく見えるだろう？　どうだ？　うっとりするほど美麗じゃないか・・」

そう言う間も、サラザールの腰はセフィリアに密着したまま、くりくりと動いている。

「あ、ああっ！　い・・いやっ！・・・」

「ほら、突かれるだけでなく、こういう動きもいいだろ？　どうだ？　俺のIIをはて味えろ！」

抗しきれず、屈服しだ、顔面の奥に隠れ肉のIIがサラザールを見上げる。

何かをおねるような、諦めた顔が色気を感じだで、男の欲情を煽くそそる、

「色っぽいぞ・・・この娘・・・絶品じゃないか・・・」
「あう・・っ・・・・」
セフィリアの口唇に塞がれたサラザールの唇が、耳朶を吸う内唇まで蠢
き回ります、
唇を奪われた手が、乳房を揉む、
「はぁ・・っ・・・」
吸くセフィリアのヒップの上を、興奮した男の唇がくりくりと動き、その
唇で、逞しい男根がセフィリアの熱く濡れた女体を焼き焦している、
サラザールの責めに、無意識に応じて喜ぶセフィリアの姿は、ドートン
を振り立てた、
「ちょっと・・・我慢できませんな、これは、私も、少しだけ参加させてもら
いますぞ・・」
ドートンの手が、丸つん尻いの乳房を揉む、唇を舐め、上唇の内側を手が
這う、

「あ、あ・・だめ・・だめ・・・」

感じすぎて抵抗することもできず、ただ、うわごとのように繰り返す、セフィリアの身体を2人の男たちの舌と手が這い回る、太腿を手が這い上がっていく。

「だ、だめ・・・やめて・・・」

「何が、だめなのかな？　もしかして、ここかな？　いや・・やはりここかな？」

嘲笑うかのように動き回る指は、セフィリアをいっぱいに広げて深々と刺さっている男根の周囲を這い回り、ついに小さな芽を摘み出した。

「あ、あっ！　ああっ！・・・」

悲鳴を上げ、最も敏感なところを探られる刺激に、ビクン・ビクンと反応する身体を押さえつけ、なおも男たちの愛撫は続く、

セフィリアの意識は、極限に達しようとしていた。

サラザールは、背中に舌を這わせながら、横に寝るセフィリアの姿を見つめていた。

両手を拘束された美しい女が、2人の男の濃厚な愛撫を受けて、身を捩わせている。

極悪寸前だった。

「・・どうだ・・感じすぎて反抗もできないだろう？　では・・そろそろ、その身体で、この俺を満足させてもらおうか・・」

ガチガチのペニスを先端まで引き抜き、次いで力強くセフィリアの身体を貫く、

続けざまに、大きな動きでセフィリアを犯す。

「あああっ！　いやっ！　いやああっ！」

セフィリアの内部で暴れている、男の熱い塊、とても、耐えることなどできなかった。

セフィリアは、身体を激しく跳ねさせながら、ペニスの責めから何とか逃れようとする。

サラザールは、そんなセフィリアの腰を引き寄せ、その秘部を深々と何度もえぐる。

「ほら、ほら・・・どうだ。感じるだろ・・・たっぷり味わえよ・・」

激しく、絶え間なく続く淫らなペニスの責めを受け、セフィリアの精神は限界に達した。

「いやあああ――っ！」

んっ…!!
…っ!!
ミシャラ
ミシャラ
んっ!!
あぁっ!!
グチュ
グチュ

快感が極限に達したセフィリアの顎を、ツーッと涙がつたう。
長い髪を振り乱し、泣き声を上げて喘える。
「泣くほどイイのか？　まだまだ、激しくなるぞ、ほら、凄いだろ？　イキそうだろ？」
耐をつき、ヒップを高く突きだした淫靡な身体を、サラザールは高ぶる責め立てた。
色っぽく泣き続けるセフィリアを、サラザールは夢中になってむさぼり犯し続ける。
「あああぁぁぁーーーっ！」
ついに、セフィリアは、腰をガクガクと揺らして絶頂に達した。
その瞬間、ギュッ・・とサラザールのペニスを締め付ける。
「うぅっ・・」
サラザールも、快感の頂点だった。
「いくぞ、中に出してやるぞ・・そら！」
最後に突き込んだその奥深く子宮口で、サラザールは、ペニスをドクドクと激しく脈打たせながら、欲望のほとばしりを放った。

んッ!!
ビクッ!!
ぶるぶる
あぁ!!あぁ
ビクッ
ぶるぶる
ギュッ

強烈な絶頂だった。
「は・・あ・んっ・・・」
ビクビクと全身を痙攣させ、快楽の余韻に浸っているセフィリアに、サラザールは満足の声を漏らした。
「よかったぞ・・・セフィリア殿。また機で可愛がってやろうな・・・さて・・・お待たせしましたな、ドートン殿。最初を譲ってくださり、ありがとうございます」
「なあに・・・恐らく、私の方がしつこくて長いですからな、いいっていうことですよ・・」
ドートンがニヤリと笑った。

ガチガチに強張ったペニスを見せつけ、ドートンがセフィリアに迫る。
「どれ、今度は、私も味見をさせてもらいましょうか、セフィリア殿・・」
「い、いや・・・・、来ないで・・・」
手錠をガチャガチャ鳴らし、逃げようとするセフィリアの細い足首を掴み引き寄せる。
「さて、セフィリア殿。たっぷりと愛し合いましょうか・・」
綺麗な脚を肩にかけ、セフィリアの身体にのしかかっていきながら、ゆっくりと、いきり立つペニスを突き立てる。
「ああっ！・・・・く・くくうっ・・・」
細い身体は、白い顎と背中を同時に大きく伸け反らせ、ドートンを受け容れさせられていく。
熱が解めぬ女の身体は、犯される歓びに再び燃え上がり始めようとしていた。
「あっ・・はっ・・・んんうっっ！」
敏え切れないほどイカされ、全身が感じるようになっているセフィリアは、ペニスの先端の侵入にビクンと眼を動かし、埋め込まれていきながら細かく身体を痙攣させる。
ドートンの強引な侵入に、伏せた長い睫毛が、ふるふると震える。
ドートンは、そんなセフィリアの顔を見つめながらニヤニヤと笑った。

そんなに感じるのですか…

そんなことで私のセックスに耐えられますかな？

時の番人といっても まったく可愛いものですな

ぶるぶる

グッ

ギシギシ

くっ…！

ほら 完全に根元まで入れますぞ…

グチュ

グチュ

ああっ！

セフィリアの腰を固定し、ペニスをずぶずぶと奥深く埋め込んでいく。
「あ！・・くくっ・・はあっ！・・」
セフィリアの身体が、のたうち跳ねる。
しかし、その下半身には、ドートンの男根が深々と突き刺さっていた。

「あっ・・くっ・かはっ・・・・」
ドートンは、腰を動かしていない。しかし、太い杭を、体内に打ち込まれたセフィリアの身体には、そのことがかえって苦しみとなっていた。
「ふふふっ。何だか辛そうですが、どうかしましたかな？」
ドートンの楽しそうな声が、セフィリアには恨めしく響く。
いっそのこと、激しく犯される方がよかった。
このように、女の官能を引きずり出され、生殺しにされている状態は、セフィリアにとって拷問だった。思わず、快感を求めて腰がくねりそうだった。
・・だめ・・・いけない・・男の思い通りになど・・・
唇汁が、じっとりと滲んでくる。首を左右に振って、狂おしい欲求に耐えようとする。
求めるものが与えられず、セフィリアの全身の性感は、高められるだけ高まっていく。
ほんの微細な刺激にさえ、反応してしまいそうなほど、肌がびりびりしてくる。
そのとき、ドートンが、不意に胸に吸い付いてきた。
「ううっ！！」
ビクンと大きく身体が跳ね上がる。
乳首を転がす、ねっとりとした舌が、腰にまで響くびりびりとした快感を呼び起こす。
しかし、それだけではない。その弾みでセフィリアの秘部は、ドートンの太いペニスを締り上げてしまっていた。
「あああっ！！」
セフィリアは悲鳴を上げ、軽い絶頂に達した。

こうやって乳首を舐められると…またたまらなくなってくるのではありませんかな？

ご自分から腰を動かしてもいいのですよ？

レロ

そのような…イヤらしいこと…するわけ…ありません……

ふるふる

さっきから私のペニスをキュッキュッと締め付けているのはなぜですかな？

本当はいやらしい事を望んでいる証拠ではありませんかな？

ピチャ

ピチャ

グッ

ギュ

ビクッ

私のモノが中に入っているのがわかりますかな？

ズズ

セフィリア殿を犯したくてウズウズしているコイツですよ

ご希望ならコイツでセフィリア殿を狂わせてあげますよ

グチュ

く…くくっ…！

ビクッ

け…汚らわしい…

ぶるぶる

そんな…イヤらしいことするのは…もう…やめてください…

手錠につながれていてはどうしようもないですな
さわ
さわ
ビクッ
ギシ
ビクッ
ギシ
背中をうなりに反らせながら、セフィリアは何とか声を飲み込む。
無一杯の抵抗だった。
しかし喉は震え、顎を大きく反らせた表情はどれだけ感じているのかを示しているようなものだった。
その身体は、ペニスから送られてくる律動に、ビクビクと身体を反応させている。
無駄な抵抗は止めて一緒に楽しむとしませんかな？
こんなにイイ身体しているではありませんか？
くくっ…うっ…馬鹿な…ことをっ……

第二杯の抵抗だった。

そんなセフィリアに、ドートンはリズムよく軽い律動を送り込み始める。

「そうですか？　しかし、手錠に繋がれていては、どうしようもないですな。無駄な抵抗はやめて、一緒に楽しむとしませんかな？　こんなにイイ身体をしているではありませんか・・」

「くくっ・・うっ・馬鹿な・・ことをっ・・あっ・・」

しかし、瞳は潤み、頬を赤く火照らせた表情は、どれだけ感じているのかを示しているようなものだった。

その身体は、ペニスから送られてくる律動に、ビクビクと身体を反応させている。

「その強がりが無駄だと言うのですよ・・・・ほら、身体はこんなに感んでいますよ・・」

首筋に舌を這わせながら、腰を再び突き上げる。

「ああっ！」

セフィリアが、白い喉を仰け反らせる。

そのとき、セフィリアの瞳が、ペニスを求めて悩ましく微妙にくねったのを、ドートンは見逃さなかった。

「ほう・・ついに自分から腰を振りましたな？　ふふふ、いい子ですな・・・・いいでしょう。あとは、私に、働いて欲しいのですな？　では、ご希望にお応えするとしましょうか・・」

セフィリアの腰を大きく広げ、その腰を、ドートンが左右についた両腕に引っかける。

大きく広げた＝字を描くような脚にする。

腰を大きく広げ、秘部まで曝している恥辱に耐えられず、セフィリアは顔を逸らす。

ドートンは、そんなセフィリアを楽しみながら、ペニスを動かし始めた。

「い、いやああっ！」

拒絶の言葉を吐きながらも、突き上げられる度に、甘い声を上げる。

媚薬で身体中が敏感になった両体で、ドートンの責めに対抗できるわけもなかった。

セフィリアは、男に汚される屈辱に身体を震わせながらも、その快感を堪えきれない。

グチュ
グチュ
くっ！
ギシ
ギシ
んっ！
ギシ
ギシ
ビクッ
ンッ!!

ドートンが、ゆっくりと腰を動かすのに合わせて、見ない顔が現れてくる、セフィリアが顔をゆがめつつ、ドートンは、ずっぷりと埋めたペニスを引抜きながら、

「ふふふっ、思った通りでしたな、イヤだなんて言いながら、本当は、早くコイツを入れて欲しかったのでしょう？　恥ずかしがる顔をして、早く犯されたくてたまらなかったのですな？　その表情だ、ほら・・・聞こえますかな？　こんなに母体は飲んでいますぞ・・・」

ドートンのペニスが、セフィリアの中から引抜かれ、再び奥まで突き入れる度にクチュクチュという音が部屋に響く、

「母の淫乱なんかやっていたのでは、淫乱不倫を繰り返すばかりで、解放することもできないでしょう？　私の愛人になれば、毎日ひっきりなしに抱いてあげましょうですよ・・・」

延々と続く、ドートンの言葉責め、セフィリアは、目の前の男に問いつめられていた、

「わかりませんかな？　コイツのような、女の姉妹が、コイツの母を見たら何みつきですよ・・・ほら・ほら・・感じると言ってちゃんなさい・・・」

「だ、誰が、そんな・・・ことを・・・あっ・みろっ・・」

ギシ
ギシ
ビクッ
ビクッ
んっ！
…っ!!
わかりますかな？
コイツのよさが
女の身体がコイツを
覚えたら
病みつきですよ
グチュ
グチュ
ビクッ
ぶるぶる
ぼら…
ぼら…
感じると言って
ごらんなさい…

ほれほれ
どうですかな？
いいでしょう？

ピチャ

ピチャ

んっ！

…！

もみ

もみ

ぶる
ぶる

はうっっ…

ギュリ

レロ

んっ…！

ビクッ

ドートンの忍しい突き込みに、セフィリアの身体は激しくくねり必える。

その秘部は、押し入ってくるペニスを、少しでも奥へ奥へと呑み込もうとする。

「んっ！・・・くうっ！・・んんっ！・・」

「これは・・まさに、極上の女といったところですな・・・。時の香人なぞには勿体しい。実にもったいない。素晴らしい身体ではございませんか・・」

興奮に駆られ、激しく腰を打ち込む。

セフィリアは、次々と襲いくる快感の波に翻弄されるばかりで、何も考えることができなくなっていた。

熱い吹雪の地を、何度も深々と突き入れられて、屈辱にしわを寄せて喘え喘いでいる。

透明感のある澄み通った綺麗な声が、ドートンの興奮を煽ふらせていく。

この上ないほど淫らで、またこの上ないほど美しい姿だった。

セフィリアの姿に、ドートンは、急激に快感が高まっていくのを感じる。

「そろそろ、私もいきますぞ・・・」

ドートンは、熱い高ぶりを出し尽くす最後の最後まで、セフィリアの身体を味わおうと、奥まで届けとばかりに体重をかけて強く突き入れる。

「いや、いやっ・・また・・あああぁ――――っ！」

再び身体を汚される予感も束の間、身体の奥で男の欲望の象徴が、これまでになく大きく膨張するのを感じる。

瞬間、ビクッ、ビクッと痙攣するように動くペニスに、セフィリアも狂り詰める。

・・あぁ・・また、身体の中に・・・・

熱い高まりを、秘部の奥に吐き出されたことを感じ、セフィリアの身体が、ビクビクッと痙攣する。

「んうぅぅっ！！　あああぁぁぁぁ――――――！！！」

汗に濡れ、美しく光らせた裸身を反らせ、セフィリアは絶頂に達した。

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ギシ
ギシ
グチュ

エピローグ

数日間後、

男たちの欲望から、やっと解放されたセフィリアは、バスルームにいた。

バスルームとはいえ、豪華ホテルの大浴場といっても過言ではない広様の中、セフィリアの喘ぎ声がこだまする。

「今度は、そこに手を突いて、尻をこっちに向けるんだ・・・」

男の命令に、湯の中のセフィリアは、大人しく浴槽の縁に手を突き、尻を突き出す。

すかさず、別の男が、そのヒップを後で回し、顔を埋める。

前からも、また別の男が、開かれた股間に顔を埋めてくる。

男たちは、ボルディンとその部下たちであった。

「くくくっ、いいケツしてるじゃねぇかよ、じっとしてろよ」

「うっ・・・あ、あ・・敏感です・・・」

股間のそこら中を這い回る舌の動きに、セフィリアの背中が仰け、いやいやをするように上体が揺れる。

「恥ましい声を出すようになったものだな、実験には、大事なお客がまるんだ、お前には、たっぷりと相手をしてもらうつもりだ、それまでに、お客好みの身体になってもらうからな・・!」

大事なお客とは、麻薬組織の大物に違いなかった。

後ろから、秘部に、アヌスに滑り込んでくる太った舌に喘きつつ、セフィリアは考える。

このまま、ボルディンに気に入られれば、実験には麻薬組織の大物に会うことができる。

上手くいけば、トップの顔を見ることも可能だ。

・・今度こそ・・

静かな浴室を舞に響めるセフィリアのヒップを、ボルディンの両手が後で回す。

「確かにイイ尻だ、よるいっきたくなるようだな・・」

次いで、ボルディンのいきり立った肉棒がねじ込んでくる。

「うっう・・あぁん・・っ・・」

魅力的なヒップを揺み、激しく前後に揺するボルディンに、セフィリアは、艶っぽい女の声をあげて応える。

その顔は、光点は定まらず、恍惚とした色を浮かべている。

「さっきは、随分と気分を出していたな？　あの政治家たちのは、そんなによかったか？」

ボルディンに続いて、今度は2人の男たちが、卑猥な言葉を投げかけながら、セフィリアを間に挟んで身体を責めてくる。

後ろから、前から、男たちの硬いペニスが、セフィリアの身体をこじ開け入ってくる。

「これはよ・・・無絶するほどイイっていうぜ、この味も教えといてやるよ・・」

「あっ、あっ・・・あぁぁぁんっ・・・」

同時に2人の男に、身体を犯される感覚は、今まで味わったことがないものだった。

男たちが前後から腰を動かし始めると、セフィリアは思わず絶叫を挙げた、その裸身をくねらせ始める。

このとないほど淫らで、またこのとないほど美しい姿に、男たちの興奮は際限なく高まっていく。

再び四つん這いで、前後の口にペニスを同時に咥え込まれるセフィリアは、下になった左手が

らは、乳首を弾まれ、舐め転がされ、失神寸前に追い込まれていた。
ボルディンが、その正面に近づき、股間の高ぶりを目前に見せつける。
「褒美をやろう・・・コイツを咥えるんだ・・・」
上気して潤んだ目でボルディンを見つめたセフィリアは、切れ長の瞳を閉じると、ピクピク
脈を打ち、硬く反り返った男根に、ピンク色の舌を突き出した。
ゴクッ・・・
セフィリアの白い喉が上下に動き、口いっぱいに呑み込んだ太い男根に舌を這わせる。
「そうだ・・・上手だぞ、3つの口全部に、コイツを咥え込んだ気分はどうだ・・・」
・・くっ！・・・
その手刀を閃かせる衝動に駆られながら、セフィリアはその拳を懸命に握りしめる。
セフィリアの胸に、決して忘れることのできない、前回の苦い思い出が去来する。
あのとき、セフィリアは麻薬組織の首謀人物を、発作的に斬ってしまったのだった。
・・後悔はしていない・・・
けれど、その後の捜査の進展が難航したことは、紛れもない事実だった。
・・今度こそ・・・
セフィリアは、固く決心する。
そのためにも、今はこの男たちを倒すことはできないことだった。

セフィリアに、抵抗の素振りは、もうない。　男たちも、そのことは十分に承知している。
セフィリアを、ただの女と思いこむ彼等は、自分たちの手に堕ちたものと考えていた。
政治家の2人も、その点では同じだった。時の番人と知っても、その卓越した戦闘力や、危険性までは、全く認識していなかった。
それどころか、他の女と同じく、セックス漬けにしてやったとばかりに意気揚々と帰路に就いたのだった。
だから、ボルディンに、そのことをわざわざ教えて、女の価値をつり上げてしまうことはするはずもなかった。時の番人を手に入れた盗賊らは、それほど計り知れないものだった。
男たちは、これからもセフィリアを性の奴隷として、ボルディンに献上するつもりだった。
しかし・・・その機会は二度と訪れることはない。
翌日には、目が覚めぬ身体になっているだろうことは、セフィリアだけが知ることだった。

間もなく、男たちは快感の高まりとともに、その欲望の塊液を存分に放つ。
セフィリアもまた、その塊液に汚されながら激しく昇り詰め、男の身体に崩れ落ちる。
今日ある命が、明日はないことに男たちは気づくわけもなく、セフィリアの身体にむらひたすら征服する。
物事は、やっと解決に向けて少しずつ進み始めていた。

あとがき＊＊＊

ついにジャンプ系最後の大物といわれている（いわれてない?!）セフィリアで描きました。
この本は「なかなか」さんの小説がもとになっています。男性のセリフとか責め方とかがいつものクリムゾンコミックスとは違う感じがしますよね？
今回は小説とマンガを半々くらいの比率でミックスしてみましたがどうでしょうか？絵では表現しきれないような部分を文章で補完できれば…と思ったんですけど…。文章のほうが絵よりHな時もありますしネ♡

ちなみに、この小説、今回のお話が実は第三話らしいです。今回の本が好評だったら、一話二話も同人誌として発行したいです☆

セフィリアはクリムゾンコミックスにはピッタリなキャラクターだと思ってます。今後も普通の形式のマンガで同人誌を出したりしたいな。次は黒い服着せたままとかにしよーかな…。原作でもっと露出度の高い服着てほしいなあ…。

初刷　２００２年６月２日発行
発行　クリムゾン
漫画　カーマイン

「セフィリアの使命」

印刷　大陽出版株式会社

yamaji@on.cs.keio.ac.jp

http://www.alles.or.jp/~uir/

クリムゾン　コミックス
Ａ３４－１

麻薬組織を探るためにある男を追っていたセフィリアはその途中、電車の中で大勢の痴漢たちに囲まれてしまう。尾行中だったセフィリアは目立つ行動をとるわけにはいかず、なすがままに体を触られ、気づかないうちに媚薬のカプセルを秘部に入れられ、一般人相手に抵抗もできないほどに堕とされてしまう。そのままホテルに連れ込まれセフィリアは女としての屈辱を思い知らされる。

FOR ADULT ONLY